

能界展望(平成28年)

表, きよし / OMOTE, Kiyoshi

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

129

(発行年 / Year)

2019-03-31

能界展望 (平成二十八年)

表 きよし

はじめに

この年は目立った大きな動きは見られなかったが、静かに世代交代が進んだ年だった。まず役者に目を向けると、各流派の宗家の交代が目につく。詳しくは「襲名・改名など」の項に記すが、ワキ方宝生流、大鼓方葛野流、小鼓方観世流、太鼓方金春流に新たな宗家が誕生した。またシテ方喜多流宗家、大鼓方石井流宗家もこの年に逝去されており、新しい宗家の誕生は翌年以降となったが、これだけ多くの流派に動きがあった年は珍しい。

次に能楽堂だが、東京の観世能楽堂は翌年の完成に向けて銀座で着々と工事が進められた。矢来能楽堂は前年末のリニューアル工事を終えて、快適な観能空間に生まれ変わった。座席数を減らして余裕のある空間を生み出し、座席の背面には謡曲詞章の一部を刻んだプレートを付けるなどの工夫も凝らされている。京都観世会館では6月から8月にかけて大規模な改修工事が行われ、座席・絨毯の取り替えのほか、空調や照明など様々な部分が改良された。また4月には福井駅西口に福井能楽堂が開場し、5月に観世流による特別公演が行

われた。駅前再開発によって誕生したビル内に設けられた能楽堂であり、さまざまな形で活用されることを願うばかりである。能楽堂ではないが、京都の平安神宮近くにロームシアター京都が開館し、1月に舞台開き特別公演が行われた。約2000人収容のメインホールと約700人収容のサウスホールがあり、サウスホールでは能楽の上演も可能である。ホールや寺社の建物内・境内など能楽堂以外の公演が年々増加しており、環境の整ったホールは能楽と接する様々な機会を提供する場となるだろう。

催しに関しても、ただ公演を行うだけでなく、事前講座で演目の解説をしたり体験の場を設けるなど、多くの人に能を楽しんでもらおうという工夫が目立つ。この年から宝生流が宝生能楽堂での月並能の前に「能+1」として講座や対談を入れるようになったのも、こうした取り組みの一つである。小学生を対象とした体験教室や鑑賞教室、小学校・中学校などの教員を対象とした能楽教室も増加している。すぐに効果が出ることを期待するわけにはいかないが、子供の時の体験が大人になってから能楽堂に足を向かわせる契機となる可能性は十分に考えられる。いろいろな試みを行い、随時見直し

ながら継続していくことがまだまだ求められている。

謡人口の減少によって能楽関係の新聞・雑誌の発行が困難になっているが、名古屋の能楽情報を発信してきた『能楽の友』紙が前年11月で閉刊となった。東京の情報に偏りがちな中で貴重な存在だったが、編集担当者の高齢化もあり、やむを得ない選択だったらしい。こうした能楽関係紙誌に能評や考察を発表してきた山崎有一郎・堀上謙もこの年に逝去している。一方で、能楽情報を外部に向けて発信していく新たな方法も模索されている。インターネットでの情報発信は今や当たり前ではあるが、ふだん能楽に接することのない人々に情報を伝えていく工夫をさらに積み重ねる必要がある。

この年の8月にはブラジルのリオでオリンピックが開催され、いよいよ次は東京オリンピックであることを強く意識させられた。オリンピックを機に日本文化を世界に発信しようという意気込みが各所から湧き上がっているものの、実際にどう取り組んでいくかになると、なかなか簡単ではない。来日する外国人や日本の各地から競技場によってくる人のために、東京オリンピックの期間中は毎日どこかの能楽堂で気楽に能や狂言が見られるようになれば、競技だけでなく文化にも触れてもらう良い機会となるだろう。

いつものことではあるが、努力不足で入手できた情報には限りがあり、当然取り上げるべき事柄が抜け落ちているケースも多々あることと思うが、ご寛恕いただきたい。なお文中では敬称を略させていただいた。

さまざまなかほし

【復興支援能・狂言】

今年も東日本大震災復興支援のための催しが行われたが、東日本大震災復興支援を名目とする公演は減少しつつある。一方、この年の4月に熊本県から大分県にかけての地域で最大震度7の地震が発生して多くの被害をもたらしたため、熊本地震復興支援の催しも行われた。近年では様々な災害が日本列島を襲っている。復興支援の取り組みにはさらに力を注いでほしい。

◎第六回「東日本大震災義援能」 3月11日。京都観世会館 昼夜二部制で、一部は半能(巴)河村晴道など、二部は半能(鞍馬天狗)大江又三郎など。

◎「能楽チャリティ公演」熊本地震被災地復興のために」 8月25日。ロームシアター京都。昼夜二部制で、一部は(経正)味方團、(羽衣)金剛永謙、半能(小鍛冶)宮本茂樹など、二部は半能(橋弁慶)浅井通昭、(羽衣)片山九郎右衛門、半能(舍利)豊嶋晃嗣など。

◎「水前寺成趣園能楽殿にて支援狂言」 7月18日。水前寺成趣園能楽殿 (柿山伏)深田博治、(附子)野村萬斎など。

【復曲・新作など】

この年も多くの新作能・新作狂言が初演・再演された。特に目についたのは、4月に多田富雄7回忌追悼公演で上演さ

れた新作能(生死の川―高瀬舟考)である。免疫学者ながら能への造詣が深く、多くの新作能を生み出した多田富雄が森鷗外の『高瀬舟』をもとに作成したもので、妻を安楽死させた夫の亡霊が、自分の罪は何なのかを高瀬舟の舟人に問い続ける。6月に豊田市能楽堂でも再演された。平成24年から復曲を手掛けてきた京都観世会の4曲目の復曲は高浜虚子作の新作能(鐵門)。大正5年以来百年ぶりの復活上演となった。地域色の強い作品の新作・復曲も目立つ。(六戸)〈福山〉(生國魂)はまさに上演された地と密接に関わる作品であり、『曾我物語』を題材とする(伏木曾我)も曾我兄弟が育った曾我の地に程近い平塚での上演である。以下に新作・復曲の主なもの挙げるが、すべてを網羅しているわけではない。初演のものを中心とし、能だけに限定した。

◎新作能(真田幸村) 1月25日・3月17日。山本能楽堂。制作・山本章弘、恵阪悟。監修・北川央。山本章弘、山本麗晃、斉藤敦、古田知英、守家由訓ほか。

◎復曲能(名取ノ老女) 3月25・26日。国立能楽堂。監修・台本作成・小林健二、小田幸子。梅若玄祥、大槻文蔵、宝生和英、金剛龍謹、殿田謙吉、竹市学、鶴澤洋太郎、國川純、小寺真佐人ほか。

◎新作能(生死の川―高瀬舟考) 4月21日、国立能楽堂。6月4日、豊田市能楽堂。作・多田富雄。浅見真州、宝生欣哉、野村万蔵、松田弘之、大倉源次郎、國川純、小寺佐七ほか。

◎復曲能(六戸) 5月7日。下野市役所。山中一馬、殿田謙

吉、松田弘之、幸伸吾、柿原弘和、大川典良ほか。

◎新作能復曲(鐵門) 6月5日。京都観世会館。西野春雄・監修。河村晴道・節付。青木道喜・型付。片山九郎右衛門・味方健・制作。青木道喜、宝生欣哉、杉信太郎、吉阪一郎、谷口正壽、前川光範ほか。

◎新作能(福山) 7月16日。ふくやま芸術文化ホール。原作・森和子。制作・構成・喜多流大島能楽堂。大島政允、大島輝久、大島衣恵、江崎欽次朗、森田保美、久田舜一郎、谷口正壽、梶谷英樹ほか。

◎新作能(生國魂) 8月11日。生國魂神社。上野朝義、福王和幸、善竹隆平、野口亮、辻雅之、上田敦史、上田慎也ほか。

◎復曲能(伏木曾我) 11月26日。平塚市中央公民館。加藤眞吾、安田登、槻宅聡、飯富孔明、大倉慶之助ほか。

【海外公演】

海外公演は当たり前となり、情報が伝わってこない催しも多くあるものと思う。把握できた主な公演を掲出しておく。

◎観世宗家ニューヨーク公演 観世清和がリンカーンセンターフエスティバルに招待され、タイムワナーセンター内のローズシアターで7月13日から17日に(翁・葵上・羽衣)などを上演した。

◎勝海登ベルギー公演 日本・ベルギー修好150周年を記念して在ベルギー日本国大使館の招待を受け、10月8日〜15日ブリュッセルなど3都市で(羽衣)などを上演した。

◎新作能〔鎮魂―アウシユヴィッツ・フクシマの能〕をポーランドで上演。アウシユビッツや東日本大震災での犠牲者への祈りをテーマとする新作能。元駐日ポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ作、演出・笠井賢一、舞台監督・小川幹雄。11月1日にアウシユヴィッツの聖ヨゼフ教会で観世鏡之丞などにより上演、4日・5日にプロツワフのシアター・オリンピックスでも公演が行われた。11月14日には国立能楽堂でも上演された。

【その他の新しい試み・新しい動き】

◎能楽堂リレー公演

能楽堂ネットワーク協議会主催により、9月8日・9日に矢来能楽堂、9月15日・16日に宝生能楽堂で能〔葵上〕を能役者による解説付きで上演。入場料も同額の4000円で、日本語と英語に対応したイヤホンガイドやタブレットも有料で貸し出された。日程や場所や演目がうまく合わないと思うように見られないのが能楽の特徴だが、こうした公演を試みていけば、東京オリンピック期間中の連続公演も可能となろう。

◎テク能プロジェクト〈ダリ能〉

国立新美術館で9月から12月にかけて開催されたダリ展のオープニング企画。9月13日に国立新美術館に設けられた能舞台で、背後の大型ディスプレイに幻想的な映像やダリ作品を投影しながら、清水寛二がダリの顔を模したジュラルミン

製の面を付けて演じた。

襲名・改名など

小鼓観世流十八世宗家の観世豊純が宗家を退き、観世新九郎が1月に十九世宗家を継承した。

大鼓葛野流十四世家元の亀井忠雄が家元を退き、亀井広忠が1月に十五世家元を継承した。

狂言方大蔵流二十五世宗家の大蔵彌太郎が1月から彌右衛門を襲名、長男の大蔵千太郎が彌太郎を襲名した。

狂言方大蔵流の茂山千五郎が9月に千作を襲名、長男の茂山正邦が千五郎を襲名した。

太鼓方金春流二十三世宗家の金春國和が平成26年12月に逝去したため、金春國直が4月に二十四世宗家を継承した。

シテ方観世流の関根祥六が永年の功績を讃えて7月に宗家から雪号「祥雪」を与えられた。

ワキ方宝生流十二世宗家の宝生閑が2月に逝去したため、宝生欣哉が12月に十三世宗家を継承した。

荣誉・受賞

◎重要無形文化財保持者(各個認定)野村四郎

認定理由「伝統的な能シテ方の技法を高度に体現し、観世流を代表する能楽師の一人として卓越した技量を示すのみならず、長年にわたり一般社団法人日本能楽会会長などの要職にあつて、斯界の発展及び後進の指導・育成に尽力し

ている」

◎重要無形文化財保持者(各個認定)大槻文蔵

認定理由「伝統的な能シテ方の技法を高度に体现し、古典曲に卓抜した技量を示すのみならず、数多くの復曲並びにその再演などにも意欲的に取組み、積極的な舞台活動を展開するとともに、斯界の振興及び後進の指導・育成にも尽力している」

◎日本芸術院賞 高橋章

◎春の褒章 亀井保雄・茂山千五郎

◎文化庁芸術祭大賞 梅若万三郎

◎芸術選奨新人賞 成田達志

◎京都府文化賞奨励賞 茂山逸平

◎国際交流基金地球市民賞 山本能楽堂

◎松尾芸能賞 富山禮子

◎観世寿夫記念法政大学能楽賞 岡本章・松田弘之 本誌42号参照

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会(平成27年9月現在)

【役員構成】

《会長》野村四郎

《副会長(常務理事)》金剛永謹

《常務理事》観世清和・亀井保雄・豊嶋三千春・粟谷能夫・高安勝久・荒木賀光・山本東次郎

《理事》喜多六平太(相談役)・宝生閑(相談役)・梅若玄祥・浅

見真州・高橋忍・金春安明・武田孝史・藤田六郎兵衛・観世

新九郎・亀井実・小寺佐七・茂山千五郎・野村萬斎

《監事》小林与四郎・櫻間金記

《顧問》西野春雄

《会員数》(平成26年7月現在)512名

◎能楽協会

【役員構成】(平成28年6月選任第37期役員)

《理事長》観世鏡之丞

《専務理事》本田光洋

《常務理事》武田宗和・香川靖嗣・國川純

《理事》一噌隆之・井上裕久・大倉源次郎・大藏彌太郎・金井

雄資・観世元伯・観世喜正・種田道一・辻井八郎・中村邦

生・成田達志・野村又三郎・廣田幸稔・藤波重彦・宝生欣

哉・前田晴啓・水上優・山本章弘

《監事》中村元彦・丸岡圭一・大和滋

《顧問》観世清和・金剛永謹・野村萬

《会員数》1206名(《会員名簿》平成28年版より)

シテ 観世404 金春105 宝生187 金剛73 喜多48 小計817

ワキ 高安13 福王16 宝生26 小計55

笛 一噌11 森田42 藤田4 小計57

小鼓 幸29 幸清9 大倉17 観世7 小計62

大鼓 葛野10 高安12 大倉9 石井10 観世2 小計43

大鼓 観世17 金春19 小計36
 狂言 大蔵76 和泉60 小計136
 支部別 東京575名 名古屋92名 北陸85名 京都149名 大阪151名 神戸47名 九州84名 本部扱23名

物故者

●宝生閣

ワキ方宝生流十二世宗家。2月1日、食道がんのため逝去。享年81。昭和9年、宝生弥一の長男として生まれる。祖父宝生新および父に師事。平成6年重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)。14年日本芸術院会員。26年文化功労者。日本能楽会会員。

●石井仁兵衛

大鼓方石井流十二世宗家(本名・増井喜彦)。2月1日、肝細胞がんのため逝去。享年80。石井流大鼓方中村享道の次男として生まれる。父および谷口喜代三に師事。平成11年に石井姓を復活、23年から石井仁兵衛を名乗る。日本能楽会会員。

●三川泉

シテ方宝生流。2月13日、心不全のため逝去。享年94。大正11年、庄内藩酒井家能役者の系譜を引く三川寿水の四男として生まれる。父および宝生重英に師事。平成15年重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)。日本能楽会会員。

●喜多六平太

シテ方喜多流十六世宗家(本名・長世)。2月21日、脳梗塞

のため逝去。享年91。大正13年、十五世宗家喜多実の長男として生まれる。祖父十四世宗家喜多六平太および父に師事。昭和52年度芸術祭優秀賞受賞。昭和61年に宗家を継承、翌年に喜多六平太を襲名。平成3年紫綬褒章受章。能楽協会理事長、日本能楽会理事を歴任。

●観世豊純

小鼓方観世流十八世宗家(本名・宮増純三)。2月18日、臍臓がんのため逝去。享年81。昭和9年、宮増豊好の三男として生まれる。父に師事。日本能楽会会員。

●帆足正規

笛方森田流。6月1日、大動脈弓部破裂のため逝去。享年85。昭和6年、東京に生まれる。貞光義次に師事。新作狂言、新作能の作成にも取り組む。平成6年催花賞受賞。日本能楽会会員。

●山崎有一郎

能楽評論家。横浜能楽堂元館長。4月26日、老衰のため逝去。享年102。大正2年、建築家、能楽研究家・評論家の山崎樂堂の長男として生まれる。朝日新聞記者を経て能楽書林に入社し、「能楽タイムズ」編集長を務める。平成8年に横浜能楽堂初代館長となる。平成16年文化庁長官表彰。

●狩野秀鵬

シテ方喜多流(本名・丹秀)。7月24日、肝硬変のため逝去。享年79。昭和12年、狩野勇雄の三男として熊本に生まれる。父および喜多実(に)師事。

●前田行雄

シテ方観世流。7月19日、老衰のため逝去。享年98。大正7年、大阪に生まれる。先々代梅若万三郎、先代梅若猶義に師事。日本能楽会会員。

●堀上謙

能楽評論家。9月10日、膵臓がんのため逝去。享年85。昭和6年、東京に生まれる。朝日新聞社退社後、「能楽ジャーナル」編集長を勤め、能の普及に尽力した。

●越賀義隆

シテ方観世流。12月4日、多臓器不全のため逝去。享年94。大正11年、大阪に生まれる。浦田保嗣、浦田保利に師事。日本能楽会会員。

●徳江元正

能楽研究者。國學院大學名誉教授。11月30日、膀胱がん転移のため逝去。享年85。昭和6年、東京に生まれる。白田甚五郎に師事し、中世芸能史を研究。